

岬に眠るコンブラ瓶



知床岬で採集された出土したコンブラ瓶
(口縁部は欠損している)

知床岬には、下末吉海進により形成されたと推測される平坦地に続縄文～オホーツク文化期の集落跡が窪みとなって確認されており、アイヌの人々の送り場・砦跡ものこされています。

古代から多くの人々が暮らしたこの地では、土器や石器の他に、鉄鍋や陶磁器の破片も地表面にごろると露出しており、中にはちょっと珍しいものも見つかっています。今回は、そんな珍しいものの1つ“コンブラ瓶”についてふれてみます。

コンブラ瓶の誕生

コンブラ瓶は、江戸から明治期にかけて長崎県波佐見の窯で生産されていた3合ほどの白磁瓶です。器高は20cmほどで、特徴はなんといっても灰色の器肌に藍色の顔料で記されたオランダ語です。幕末のものはJAPANSCHZOYA(日本の醤油)、JAPANSCHZAKY(日本の酒)と手書きで染付けされています。

その名の由来となったコンブラとは、ポルトガル語のコンブラドル(仕入れ係)の略で、長崎出島でオラ

ンダ貿易にあたった特権商人のことを指しています。鎖国政策下の日本では、オランダ人は出島の中で必要な物資を調達するしかありませんでした。そこで、特権商人がオランダ人向けに売り込み用に発注し、誕生したのがコンブラ瓶でした。

アイヌ文化への影響

このように、はじめは主にオランダ人向けに生産されていたコンブラ瓶ですが、実は波佐見や出島の次に多く見ついているのは北海道です。太平洋側では函館市や苫小牧市や根室市など、日本海側では松前町、余市町、石狩市などの沿岸部で見ついています。

また、苫小牧市の弁天貝塚では、アイヌ文化期の貝塚からコンブラ瓶が出土しています。元々、陶磁器を使用しないアイヌの人々ですが、和人が廃棄したものの中から使えるものを再利用して、自らの社会に取り込んだと考えられています。

知床岬での発見

オホーツク海側では、1985年に知床岬で採集されたものが今のところ唯一の発見例です。それにしても長崎で量産されていた醤油や酒を詰めた瓶が、遠路はるばる知床の先端部まで運ばれてきたというのは驚きです。こういった経緯で北海道へと入ってきたかは諸説ありますが、幕末には九州と北海道を結ぶ販売ルートが開けていたことは明らかです。

また、知床岬で見つかったものは、道内で出土が確認されている20箇所ほどの遺跡の中で、唯一アイヌの送り場と考えられるところから見つかっています。道内の流通時期は、およそ1850～60年代と考えられており、この送り場も同時期かそれ以降のものといえます。

知床に暮らしたアイヌの人々は、和人から入手したコンブラ瓶にどのような想いを抱いていたのでしょうか。陶磁器が与えたアイヌ文化への影響に興味を湧きます。

今秋開催予定の特別展「世界遺産の核心、知床岬」では、コンブラ瓶をはじめとする陶磁器類・鉄鍋・火皿などアイヌ文化期の遺物を展示する予定です。

(平河内毅)

発行 知床博物館協力会 2015.7.25
099-4113 北海道斜里郡斜里町本町49
斜里町立知床博物館内
TEL: 0152-23-1256 FAX: 0152-23-1257
<http://shiretoko-ms.sakura.ne.jp/>